

(西暦) 2017 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

年長児における協調運動の特性と作業遂行の関連

学位の種類: 修士 (作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 16896601

氏名: 池田 知美

(指導教員名: 伊藤 祐子 准教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

【目的】

本研究は、年長児の協調運動と作業遂行の関連を明らかにするため、協調運動の評価である Movement Assessment Battery for Children - second Edition (以下 M-ABC2) と Assessment of Motor and Process Skill (以下 AMPS) を用い、年長児の協調運動の発達状況の特性を把握し、作業遂行との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】

都内 2 園に在園する年長児 29 名 (男児 12 名、女児 17 名、平均月齢 71.41 ± 3.25) を対象に M-ABC2 と AMPS を園内で実施した。両検査時間は 1 人合計 40 分から 1 時間であった。また、全般的な発達段階を把握するため、KIDS 乳幼児発達スケール (以下 KIDS) を実施し、発達指数 (Developmental Quotient 以下 DQ) 70 以下は除外することとした。分析方法は、Pearson の相関係数、Mann-Whitney の U 検定、AMPS のパーセンタイル順位を用いて協調運動の特性と作業遂行との関連を検討した。統計解析は SPSS Statistics 24 を使用した。

【結果】

M-ABC2 の総合得点は、93.1% (29 名中 27 名) が定型発達児、6.9% (29 名中 2 名) がリスク児とリスクを疑う児であった。領域別ではボールスキルの得点が低い傾向にあり、バランスでは男児と比較して女児の得点が有意に高かった ($p=0.014$)。また、リスク児、リスクを疑う児は同年代のパーセンタイル順位と比較して低い運動技能であると示された。さらに M-ABC2 の結果が定型発達児に含まれている対象児の中に、AMPS で示された作業遂行の運動技能が同年代よりも低い児が存在していた。M-ABC2 と AMPS の相関については、M-ABC2 の手先の器用さと AMPS の運動技能の間に中等度の相関を認めた。

【考察】

今回の研究対象である 5 歳から 6 歳の年長児においては、協調運動の中でもボールスキルは漸進的に発達する傾向にあり、協調運動の発達には性差がある可能性があることが示唆された。手先の器用さは作業遂行の運動技能に影響を与えていると考えられるが、協調運動が作業遂行に影響を与えていると言い難かった。よって、協調運動に困難さを示す児の支援では、協調運動の評価のみではなく、作業遂行の評価をすることの重要性が示唆された。